



Hāf a A d a i

令和5年9月27日
グアム日本人学校
学校だより
10月号
校長 井手瑞樹

旅行者と国際人

9月11日から9月15日まで、小学5年生と中学2年生の修学旅行に引率のため同行いたしました。行き先は日本の関西です。大阪、京都、奈良を回りました。2日目のみ午後から雨となりましたが、他の日は一日中良い天気です、素晴らしい修学旅行になったと思っています。



そんな中、私が最も驚いたのは、外国人の多さです。私も日本では、生徒たちを修学旅行に何度も引率したことがありますので、関西の有名なところには何回も行ったことがあります。これほど外国人の方が多いのは初めてです。右を見ても左も見ても外国人が目に入らないことはありません。特に京都の見学先では、私たちが外国人に取り囲まれているといった感覚さえもみました。コロナ収束後、円安の影響によってインバウンドが急激に増加したということかもしれませんが、しばらくの間にこれほど変わるものかとびっくりいたしました。

同時に、この期間中、私が考えたことがあります。それは、外国人旅行者は「国際人」か?という問いです。世界では、英語が一般的に共通語として使われていますので、外国人の旅行者の方々には大概英語が通じます。もちろんイギリス、アメリカ、オーストラリアなど、英語圏の方々にとっては、どこにいても英語表記があり、ある程度英語が通じて、まるで自分の庭のように感じられるのかもしれませんが。そういう意味ではうらやましさを感ずるところです。では、英語圏から他国へ旅行に行く人たちは国際人なのでしょうか。答えはNOでしょう。

辞書大辞林で調べますと、国際人とは、「広く世界に活躍している著名な人、教養や語学力があつて、世界に通用する人」とありますが、もっと砕けた言い方をしますと、国際人とは、「日本人、外国人に限らず、国境を超えて仕事ができる人、活動出来る人、それを達成するためにその国々のカルチャーを理解し、より良い人間関係が構築できるコミュニケーション能力を持っている人」といえるのではないのでしょうか。つまり、英語がしゃべれることは必要ですが、それだけでは国際人とはいえないということですね。



国際人とまでは行かなくてもバイリンガルに育てたいという保護者の方は多いと思います。ある情報筋に寄りますと、「バイリンガルというのは、単純にモノリンガルのカ×2ではありません。完全なバイリンガルというのは、2つの言葉が話されている国に同時に住んで、2つの言葉も文化も同時に習得して成り立つものです。ですので、あくまで理想ではありますが稀と言えます」。こう言われますと、真のバイリンガルとなるのも相当大変なことだと痛感します。

では、「セミリンガル」や「バイリミテッド」という、バイリンガルの手前でもいいのかと考える方もいらっしゃると思います。それは、それぞれのご家庭でお考えになることだと思いますが、いずれにしてもそれらに到達するには、相当の努力がいるでしょう。世界へ羽ばたく子どもたちを育てるために、ご家族と本人と学校とが協力合せて、グローバル人材の育成に努力したいものだと思っております。



いつの日か、日本にあふれる外国人旅行者の中に、世界を相手に活躍する国際人として成長した、グアム日本人学校の卒業生の姿があることを楽しみにしたいと思います。